

倭の五王と前方後円墳ツアー

令和元年5月4日

村島秀次

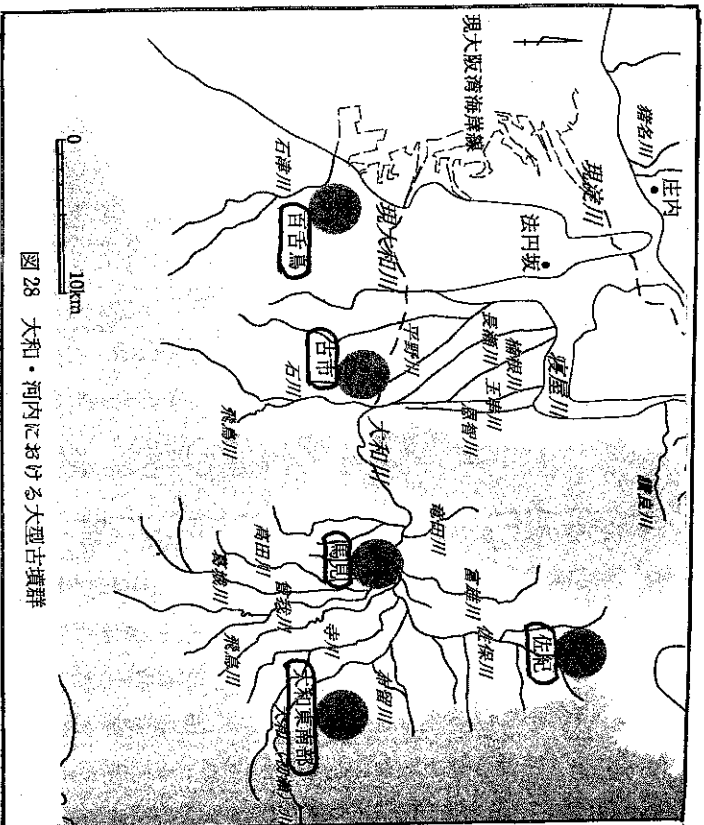


図 28 大和・河内における大型古墳群

(出典)一瀬和夫『大王墓と前方後円墳』(吉川弘文館、2005年、7月)

(出典)『古代文化を考える』73号、2018年12月

倭の五王と二つの古墳群

はじめに

『宋書』倭国伝(以下、『宋書』と略す)は、南朝梁の沈約により五世紀末から編纂が開始され、六世紀初頭には成立した貴重な同時代史料であることは言うまでもない。そして、三世紀における『魏志倭人伝』と同じように、日本の正史である『日本書紀』の内容に潤色や改変が多いだけに五世紀の実像を考える上で必要不可欠な情報を与えてくれる。

『日本書紀』の記述には「倭の五王」による中国への遣

使に対応するものがないことから、倭の五王は『日本書紀』に記録された天皇ではないとする説もあるが、遣使が記述されない大きな理由は、遣使や朝貢が好ましくないとする『日本書紀』編纂者による小中華主義にあると考えられる。

つまりは、日本は中国と同格の国で、冊封体制下に入ることとは相応しくないとする立場である。同様に、冊封体制下にあった卑弥呼や邪馬台国が『日本書紀』に明確に登場しないのも同じ理由だろう。また、七世紀初頭の遣隋使についても、六〇〇年の遣使については『日本書紀』に記述さ

村島秀次

れず、六〇七年の遣使は中国と同等の立場との含みがある
と考えられる。倭の五王による中国への遣使は、朝鮮半島
へ倭軍を派遣するのに当って、朝鮮諸国の宗主国である中
国の承認を必要としたという当時の事情によるものと見ら
れるが、『日本書紀』を編纂した八世紀の律令政府にとつ
ては好ましくないものと判断されたのであろう。

同時代史料としての『宋書』が我々にもたらしてくる
最も重要な情報は、五世紀の五人の倭王(大王)が実は二
つの王家から出ているということではないだろうか。なお、
倭の五王に関連する先行研究については、藤間生大氏など
今まで数多くあるが、最近のものとして河内春人『倭の五
王』がよくまとまっており、参考文献も巾広い。

一、二つの大王家

筆者は、前著『もうひとつの古代史』の中で紀年延長を
行なっている『日本書紀』の本来の紀年の復原を試みたが、
『宋書』による倭の五王の遣使は四二一―四七八年の半世
紀である。四二一年の遣使は、復元紀年から考えれば仁徳
による可能性もあるが、『宋書』は讚と珍を兄弟であると
明確に記述することから、讚Ⅱ履中、珍Ⅱ反正、そして以
下は通説通り、済Ⅱ允恭、興Ⅱ安康、武Ⅱ雄略とするのが
妥当であると考えられる。いずれにしても、仁徳の時代に
宋への遣使が準備されたのは間違いないと見られる。

西暦四二一年と四二五年、『宋書』によれば倭王讚(履

本書紀)と一致する。『日本書紀』は反正を、履中の同母
弟と記録しているからである。

もう一つ重要な情報は、珍が倭を始めとする六ヶ国の諸
軍事、すなわち六ヶ国の軍事権を宋に要求していることと
ある。珍にとつては、倭国王に冊封されることよりも朝鮮
半島の南部における軍事権を宋に認めさせることが必要で
あったと考えられる。しかし、この要求はすぐには認めら
れなかったことが分かる。

そして、次の記述が注目される。

〔史料3〕

(元嘉)二十年、倭国王済遣使奉献、復以爲安東將軍・
倭国王。二十八年、加使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓
慕韓六國諸軍事・安東將軍如故。

珍の後任として、四四三年に済(允恭)が遣使するが『宋
書』はそれまでの記述方式を変えて、珍と済の親族関係を
記さない。

中国側が親族関係を確認していないとか、あるいは確認
したものの記述が漏れたとの解釈もあるが、その可能性は
低いと考えられる。なぜなら、中国においては皇帝の親族
関係は重要なことであるからである。皇帝と血縁関係がな
ければ、それは王朝交替を意味すると考えて間違いない。
例えば、隋と唐の関係でいえば、隋の將軍であった李淵は
煬帝(楊広)が弑殺された後、禪讓革命を断行して皇帝に

中)が朝貢する。

〔史料1〕

高祖永初二年、詔曰、倭讚万里修貢、遠誠宜甄、可賜除
授。太祖元嘉二年、讚又遣司馬曹達奉表献方物。

(新漢字を使用、以下同様)

最初の遣使で、倭王は自ら讚と名乗り、貢物献上に対し
て官爵を授与されたことが分かる。そして次の遣使で、讚
は安東將軍として府官である司馬の曹達を派遣し上表して
いる。注目すべきは、三世紀の邪馬台国段階とは大きく
違っていて、自ら中国風の名前を名乗り官吏を派遣して上
表していることである。卑弥呼や邪馬台国は卑字を使用し
ていることから中国側が命名していることは明らかであり
倭国側から外交文書を提出していないと見られるのに対し、
五世紀には渡来人を使って王の名前に好字を使用して外交
文書を提出している。五世紀の段階では、統一国家として
の体制がかなり整っていたと考えられる。

四三八年になると、珍(反正)が遣使する。

〔史料2〕

讚死、弟珍立、遣使貢献。自称使持節・都督倭百濟新羅
任那秦韓慕韓六國諸軍事・安東大將軍・倭国王。表求除
正、詔除安東將軍・倭国王。

『宋書』によれば、珍は讚の弟であると記述する。讚が
履中であり珍が反正であるとすれば、この親族関係は『日

即位したが、帝位は楊家から李家に引継がれ、王朝は隋か
ら唐へ変った。禪讓を受けても血縁関係がなければ、王朝
は継承されない。したがって、中国側が珍と済の血縁関係
にこだわらなかつた訳はないと考えられる。

筆者は、日本の「万世一系」思想は八世紀の律令政府に
より、中国の影響を受け、中国に対抗するために確立され
たものではないかと考えている。つまり、日本では徳のあ
る天皇が「万世一系」で継承され、不徳で王朝交替が相繼
ぐ中国よりも優れていると示したかたのではないのか。
そこで、アマテラス神話を創造し王位の正当性を主張した。
そして、仁徳紀の儒教的な記述は、中国を意識した表われ
であると考えられる。日本では「万世一系」思想が確立し
た。

四五一年、済は倭国の念願であった六国諸軍事の加号を
受ける。但し、その内容を見ると、宋と倭国の立場が違う
ことが判明する。日本が特に望んでいたのは百濟における
軍事権であったろうが、宋から与えられたのは百濟の代わ
りに加羅であった。百濟が認められない理由は、百濟はす
でに南朝に朝貢しており、宋の前身である東晋が、当時の
百濟王に対して使持節・都督百濟諸軍事・鎮東將軍・百濟
王を冊命していたからである。つまり、百濟は宋の大事な
朝貢国であったのである。

次に、済と後継者である興(安康)の親族関係は明確に
記述されている。

〔史料4〕

済死、世子興遣使貢獻。世祖大明六年、詔曰、倭王世子興、奕世戴忠、作落外海、稟化寧境、恭修貢職。新嗣辺業、宜授爵号、可安東將軍・倭国王。

ここで世子とは、王の後継ぎという意味であり、興は倭王となる以前に遣使として来たということになる(四六二年)。「日本書紀」によれば、安康は允恭の第二子である。

そして、五王の最後である武(雄略)が登場する。

〔史料5〕

興死、弟武立、自称使持節・都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王。順帝昇明二年、遣使上表曰(後略)

武は、興の弟と記述されており済の子ということになる。「日本書紀」によれば、雄略は允恭の第五子とし「宋書」と一致する。

以上、讀(履中)から武(雄略)までの倭の五王の系譜を、「宋書」と「日本書紀」で比較すると、珍(反正)と済(允恭)の間で親族関係を記述しない「宋書」が目される。実はこの時代、「日本書紀」の記述には皇子たちの反乱や陰惨な事件が多いことが、従来より指摘されているのである。(後述)

二、二つの古墳群

中国史書「宋書」の記録から、倭の五王の時代に二つの大王家が存在した可能性があると考えられるが、この仮説を傍証する考古学的知見がある。

五世紀に入ると、大王陵はそれまでの奈良盆地から移り、応神陵は「古事記」によれば河内国の恵賀の裳伏の岡に造営された後、応神の子とされる仁徳はなぜか寿陵を、和泉国の百舌鳥の耳原に造り始める。さらに、履中(讀)が百舌鳥、反正(珍)が百舌鳥野に造営した後、今度は允恭(済)が一転して、応神と同じ河内の恵賀の長枝に、安康(興)は河内の多治比の高鷲に大王陵を造営した。安康は殺害されたため大和に留め置かれたとすれば、大王陵の造営地は「宋書」に記述された大王の親族関係とびたりと一致する。つまり、讀と珍は仁徳と同じ百舌鳥古墳群に、済と武は応神と同じ古市古墳群というようにである。

陵墓とは、本来、大王の本拠地や縁故地に造営されるはずのものであり、造営地が不足している訳でもない段階で、前王の陵墓地と遠く離れた場所に新たに造営するとなると、親族関係が近いとは考えられないのは、大和の大和・柳本古墳群や佐紀古墳群と同様であろう。百舌鳥に造営したのは、外国使節の目を意識して当時の海岸線に沿って作ったとの解釈もあるが、それならばなぜ允恭から古市に戻ったのかという点を説明できない。

考古学による現在までの有力な知見では、古市古墳群においては一系譜の有力首長が七代(うち大王墓が四基)にわたって一代一墳的に、そして百舌鳥古墳群では同様に四代(うち大王墓が三基)にわたって一代一墳的に継承されたため、古市と百舌鳥を形成した二つの有力首長が、「輪番」で大王を輩出していたと考えられている。

しかし、「輪番」という表現は現実的ではなく、考古学的知見を「宋書」や「日本書紀」などの文献史料で補完すれば、二つの大王家が熾烈な争いの中で一つの大王位を奪い合っていたことが判明する。

それでは、この二つの大王家を文献史料などを使って、具体的に特定することは出来るだろうか。

三、息長王家と葛城王家

まず、主な先行研究を見てみよう。

国文学の神田秀夫氏は、「古事記」の本文を検討して、仁徳以下の十代を二つに分けて、履中・顯宗・仁賢の血統を履仲系と、允恭・安康・雄略・清寧の血統を允恭系と呼んだ。その理由を、履中系と允恭系は最後には仁賢が雄略の子女を后とするに至って結ばれるが、それに先立って履中の王子市辺の忍齒の王が雄略に残忍な方法で殺されるので、対立があり疎遠であることを指摘した。そして葛城氏が外戚となっている履中や、丸瀨氏の娘が后にも妃にも立っている反正と、そういうA級豪族を背景に持たない允

現在の大阪府堺市大仙町にある大山古墳が仁徳陵の有力候補であるが、その墳丘長は約五百メートルに達し、周濠・堤・外周溝を含めた長軸全長は八五〇メートルに及ぶ。まさに百舌鳥古墳群の盟主と呼ぶべき古墳である。その墳丘の偉容と、百舌鳥のほかの古墳群から出土する大量の武器・武具や、鉄材や馬具などが大王たちの姿を彷彿とさせる。そして、履中陵や反正陵に比定される石津丘古墳と田出井山古墳が大山古墳を取り囲んでいる。

一方、古市古墳群で応神天皇陵に比定されるのが、現在の大阪府羽曳野市にある菅田山古墳である。墳丘の全長は四二五メートルと、大山古墳よりやや小さい。古市古墳群と百舌鳥古墳群はほぼ同じ緯度で、東西に約九キロ離れて位置しているが、菅田山古墳の近辺に、允恭陵に比定される市ノ山古墳と、雄略陵に比定される高鷲丸山古墳が存在する。

さらに、古市と百舌鳥の古墳群は、その所在地が違うだけではなく、その墳丘の形も違う、すなわち設計思想が異なるという説もある。一瀬和夫氏によれば、応神陵の類型は、前方部が短く、墳丘に造出し周囲に精美な盾形周濠および外堤・外周溝を確立させる。墳丘本体は墳丘/後円部長径指数が一・七前後であるのに対し、仁徳陵は応神陵の型を踏襲しながらも、墳丘/後円部長径指数を二・〇前後と前方部を増大させて、墳丘規模全体の拡大を図っており、この墳丘本体の比率はすでに馬見型で達成されているという。

恭との疎遠な關係を表わすものと述べている。神田氏の議論を受けて、塚口義信氏は記紀に仁徳・履中系王統と允恭系王統の確執の記録があり、履中系の立場による対允恭系の物語として読むべきであると述べる。そして記紀のもとになった「原帝記」には、欽明系王統につながる仁徳・履中・仁賢系の人々を是とし、継体・安閑・宣化・(敏達)系王統と近い關係にある允恭系の人々を非難したとしている。さらに、管見の限りでは美術史出身で安藤更生門下の松本明氏は、允恭系王統を息長系と、仁徳・履中系王統を葛城系と具体的に氏族名で呼ぶ。氏は、天智天皇の系譜を遡り、父・舒明の諡が息長足日広額であることから皇統の正統血縁となった息長氏に注目し、倭の五王の時代には葛城系が台頭したため息長系が衰退したが、継体以降には息長系が皇統に復帰したと考えている。

いずれも卓見であるが、問題は、允恭(済)を履中(讚)や反正(珍)の兄弟であることを前提とした考察であることである。しかし、既に述べた通り、信頼できる同時代史料である『宋書』には珍は讚の弟であると記述があるが、済は讚や珍の弟であるとはない。さらに、済の陵墓は讚や珍の陵墓とは違う場所に造営されているとの、『古事記』の記録や考古学的知見が存在している。したがって、むしろ兄弟關係にはないと判断する方が自然であり、そうであると『日本書紀』が記述する仁徳・履中系と允恭系王統の確執が鮮明に見えてくるのではないだろうか。

じように大王家との婚姻關係が深い古代豪族であるという共通点がある。

『古事記』によれば、息長氏は開化天皇の皇子である日子坐王の後裔を、そして葛城氏は孝元天皇の皇子・大毘古命の後裔であることを主張しており、この系譜がこの時代に受け入れられていたとすれば、息長氏や葛城氏から大王が出たことを簡単には否定できないと考えられる。それ程当時であつては有力な氏族なのである。

おわりに

本稿では、中国の史書『宋書』や考古学的な知見などから、倭の五王の五人の大王が直接の親族關係がなく、息長王家と葛城王家という二つの大王家から出て、確執をくり返していた可能性について論証を試みた。

残念ながら残された文献史料は限られており、論証は不十分で現時点では仮説に留まらざるを得ない。

しかし、この仮説によれば①『宋書』に記録された倭の五王の親族關係が説明できること、②五王の陵墓が古市古墳群と百舌鳥古墳群の二つに分かれている理由が判ること、そして③『日本書紀』に描かれた大王たちの確執や皇子たちの反乱の原因が良く理解出来ることになる。

(11) 松本昭『古代天皇史探訪 天皇家の祖先・息長水依比売を追って』(アールズ出版、二〇一七年)

(12) 横田健一『飛鳥の神がみ』(吉川弘文館、一九九二年)

(13) 例えば、平林章仁『謎の古代豪族 葛城氏』(祥伝社新書、二〇一三年) などがある。

息長氏は、琵琶湖北方の近江国坂田郡を本拠地とする古代豪族であり、横田健一氏によれば息長氏の勢力の根源は、一つには美濃・尾張に至る東山道と越前敦賀方面に至る北陸道の分岐点という陸上交通の要衝にあること、また湖北水上交通の要衝の朝妻筑摩港を抑え陸上と水上交通の接点に本拠地があること、さらに「息長」はもともと製鉄用語であり、製鉄とも關係が深かった。

舒明天皇の和風諡号「息長足日広額」の息長を単に地名であると理解する説に対して、横田氏は「息長が冠せられているのは、その祖母が息長広姫、母方の曾祖父が息長真手王だからである」と、古代豪族の息長氏との關係を指摘している。さらに、息長田別王の孫に息長真若中比売という応神天皇の妃があり、その子の若沼毛二俣王の生んだ忍坂大中姫が允恭天皇の皇后であり、妹娘の弟姫、別名衣通郎女も允恭の妃となつていことを挙げ、その郷里は「時に弟姫、母に随ひて近江の坂田に在り」とあることで明らかであり、息長氏と大王の間に何重にも婚姻關係が結ばれていることを同時に指摘している。

筆者は、允恭の諡号「雄朝津間稚子宿禰」も息長氏の朝妻筑摩港との関連性も考えており、息長氏との關係が婚姻關係に留まるだけなのか確認する必要があるだろう。

一方、仁徳・履中系王統に当たるのが、葛城襲津彦を祖とする葛城氏と考えられる。葛城氏については様々に語られているので、ここでは詳細には論じないが、息長氏と同

註

(1) 『魏志倭人伝』による邪馬台国の論考については、拙稿「新・邪馬台国東遷論」(『古代文化を考える』七号、二〇一七年)。

(2) 河内春人『倭の五王 王位継承と五世紀の東アジア』(中公新書、二〇一八年)。河内氏は、倭の五王の比定は可能であるが、限界があるとする。

(3) 拙書『もうひとつの古代史』(歴研、二〇一五年)の中で、倭の五王と考える履中から雄略の年代を四四〇年～四八〇年頃とした。

(4) 音韻によれば、讚はイザホワケの省略、興はアナホのホ、武はワカタケルのタケルとし、珍と済は親族關係による。

(5) 『古事記』には毛受とあるが、ここでは百舌鳥とした。

(6) 大王陵は比定は必ずしも完全なものではなく、その比定に一部誤りがあるとしても、『古事記』に記載される陵墓は古市と百舌鳥に所在地が明確に分かれています。

(7) 一瀬和夫『古墳時代のシンボル 仁徳陵古墳』(新泉社、二〇〇九年)

(8) 広瀬和雄『古墳時代政治構造の研究』(塙書房、二〇〇七年)

(9) 神田秀夫『古事記の構造』(明治書院、一九五九年)

(10) 塚口義信『古事記』における雄略天皇像をめぐる(『日本書紀研究』第三十冊、塙書房、二〇一四年) 以上